

# メコン河流域の開発と環境に関する一考察：

## コーラート高原とメコンデルタの事例を中心に

高田 洋子

### はじめに

昨年9月にアジア政経学会は、「アジアにおける環境・開発問題と政治過程」をテーマとする国際シンポジウムを主催した。そこでは東アジア・南アジア・東南アジア・社会主義国の4つの地域セクションごとに進行中の開発とそれに伴う環境問題について、政治との関わりを中心に発表がなされ、議論が重ねられた。ここ数年の間に「環境問題」は、アジア政経学会の新しい研究領域として位置づけられるようになった。しかし、本格的な研究レベルの深化はまだこれからである。

国連をはじめとする国際機関が1980年代に示した開発と環境をめぐる基本的立場、すなわち Sustainable Development (for Ecology) の意味は、自然環境や生活環境を壊すことなく開発を維持するというものである。このような考え方は、1970年代に顕在化した対立、つまり豊かな国々が主張した『環境保護』と貧しい国々が要求した『開発優先』の二つの立場の妥協の産物である。経済成長は環境の悪化を引き起こしてはいけない、環境基盤を保全してこそ経済成長もみこまれる<sup>(1)</sup>、というわけである。

これに対して、開発は「西欧化を第三世界に持ち込むトロイの木馬」であり「力づくや誘惑

によって行われたレイプ」だと断言する人々は、自然との調和のなかではぐくまれた土着文化こそが発展の母体だと手放しで評価する。<sup>(2)</sup>

真の開発・発展とは何か、それは現代社会の根本的な問いである。同時に地球環境の保全も、人類が共通して取り組むべき課題である。

筆者は、これまでベトナムにおけるフランスの植民地支配、とりわけ直轄植民地コーチシナ（ベトナム南部）における経済開発の研究に取り組んできた。植民地の主要な輸出産品となるメコンデルタのコメ生産や、森林地帯の天然ゴムプランテーションなどの農業開発の諸問題に関心を寄せてきた。いま筆者は、その歴史の延長線上にある現在の「インドシナの開発」を、今日的な問題関心のなかに置き直す作業を進めたいと思っている。本稿は、下流部のデルタに留まっていた筆者の視野をメコン河そのものにひろげ、流域の開発と環境問題の現状について概観するための最初の試みである。

メコン河は、東南アジアの大陸部インドシナ半島を貫流し南シナ海に注ぐ、全長4350キロ、流域面積80万平方キロにおよぶアジア有数の大河である。その大きさは日本の第一級河川の20倍と言われる。中国青海省を発し、ミャンマー、ラオス、タイ、カンボジア、ベトナムの6ヶ国を通過する典型的な国際河川である。

メコン河と支流の経済開発は、基礎となる調査研究をはじめとして水力発電、灌漑、舟運などどれをとっても一国レベルの視野では、到底不可能だ。例えば上流のダム建設は、下流域の国々の農業用水の確保に多大な影響を与える。一部の産業排水による汚染は、流域の住民の漁業・飲料水・生活一般に甚大な害をまき散らす。国際河川の開発は、流域諸国間の十分な話し合いと協力のなかで進められなければならない。インドシナ半島は戦後長く紛争が絶えず、流域の平和が待ち望まれていた。カンボジア問題が真に解決されれば、メコン河をめぐって国を越えた人々の民主的な開発のあり方が、世界に問われることになるだろう。

以上述べた問題意識を持ちつつ、本稿は流域のコーラート高原およびデルタにおける最近の農業開発の事例を考察の対象とする。先ずⅠでは国際河川メコンの全体的な自然を明らかにし、日本政府が関わりをもったベトナム戦争以前の開発計画の一端を紹介したい。次いでⅡで東北タイの近年の開発による自然破壊を、またⅢでメコンデルタで進められている農業開発の現状を概観する。そして最後に、メコン流域の開発と環境問題の展望について、感想をまとめるつもりである。

## I. メコン河流域の自然と開発計画

### (1) メコン河とその流域

では、メコン河の地勢上の説明から始めよう。メコンの源流はチベット高原に発し、上流は揚子江とサルウィン両川と並行して流れている。そこは高度4500メートルを越える山脈の間に深

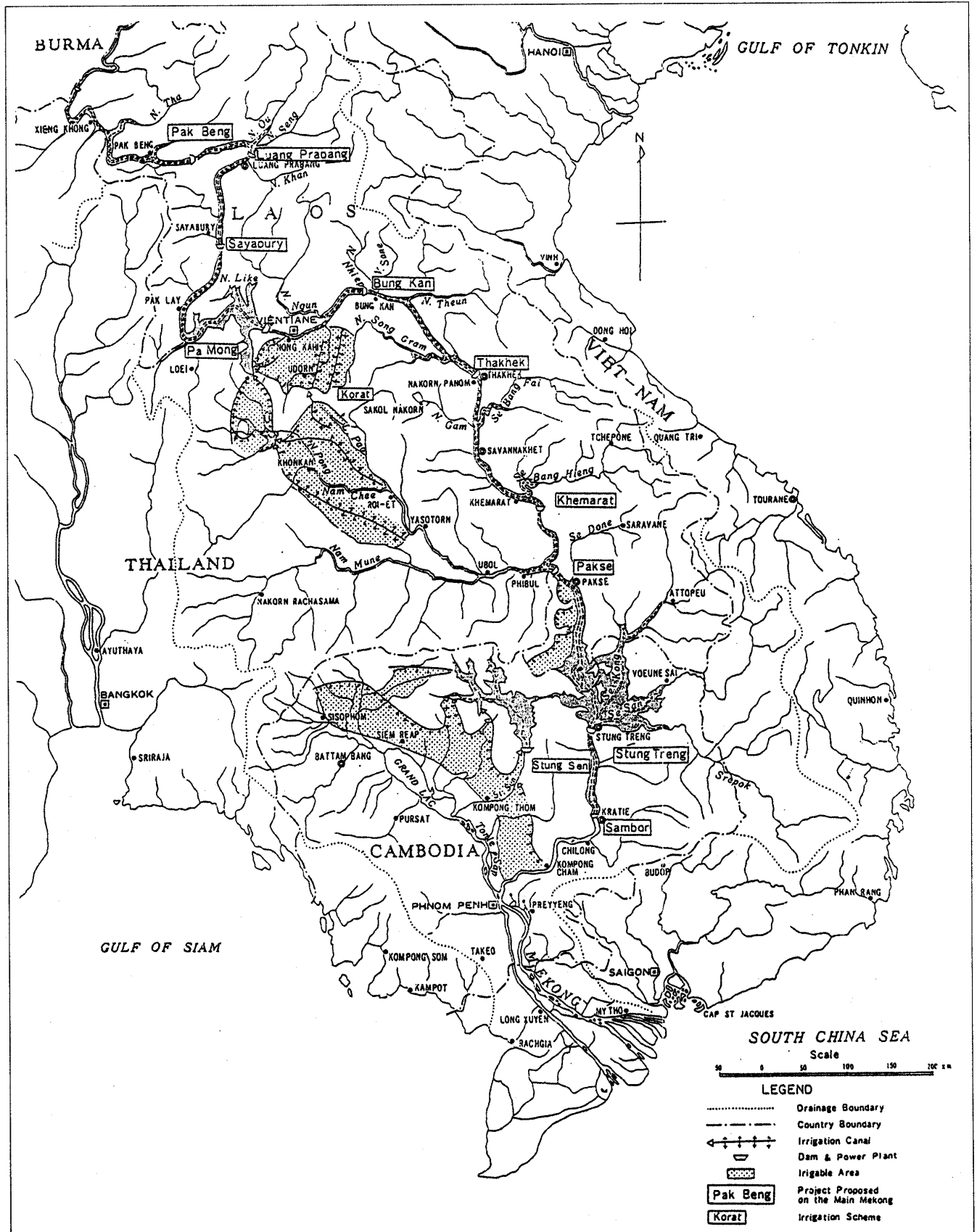
く刻まれた峡谷である。上流約1200キロの間は、集水地域が狭く支流はほとんどない。やがて中国雲南省にいたると河の集水地域は広がり、支流や集落の数が増す。中国領を1600キロを流れ、北緯22度の南で中国・ミャンマー・ラオス3国の国境地点に達する。そこでの本流標高は490メートルである。メコン河はここからミャンマーとラオスの国境をなして下り、次にミャンマー・ラオス・タイ3国の国境地点を通過する(図1参照)。

北緯20度あたりからメコン河はラオス国内を東へ流れ、河畔の山間盆地ルアンプラバン(標高300メートル)から南へ250キロ以上下り、北緯18度パモン付近で大きく東に左折してタイとの国境線をヴィエンチャン(標高160メートル)に向かう。ルアンプラバン流域は、標高1600~2000メートル級の山が連なり集落密度は増す。点在する沖積平野では米作が行なわれて人口密集地域となる。

ヴィエンチャン平野をすぎると、チュオンソン山脈の西麓にぶつかって河は南流する。サヴァナケートまでの狭い河岸平野には村落が並ぶ。左岸はチュオンソン山麓が展開し、右岸は約1万6千km<sup>2</sup>(400km×400km)の広大な面積を有す大盆地、標高100~200メートルのコーラート高原が広がる。そこはタイ国の東北部である。

サヴァナケート以南でメコン河は再び峡谷を形成し、パクムンでコーラート高原の南を流れるムーン河と合流する。そしてドンラック山脈を抜けてまたラオス領を下り、コーンの上流で分岐する。西の分流がここでは短区間ながら、ラオスとカンボジアの国境線をなしている。ラ

図1 メコン河主流開発プロジェクト案 (1961年)



出所：日本政府メコン河踏査団『MEKONG河下流域主要支流踏査総合報告書』昭和36年。  
現在、図中のSAIGONはHO CHI MINH、BURMAはMYANMAR。

オス・カンボジア国境のコーンの滝は、10キロの区間に20メートルあまり落下し、航行の障害となる。この滝を前にして、19世紀半ばにメコン河をさかのぼり中国雲南地方を目指したフランスの野心が、打ち砕かれた話は歴史上有名である。

コーンからカンボジア領へ入ると、ラオスとベトナムの高原から流下するいくつかの川がメコンに合流する。標高5メートルほどのクラチエを過ぎると、河は西あるいは南西に蛇行し、沖積平野に入る。その面積は6万km<sup>2</sup> (200km × 300km) とされ、西には天然の遊水池トンレサップ湖がある。ここでメコン河の雨季の氾濫水が吸収され、下流の流量が調節される。真夏の高水位時、湖は平常の広さのほぼ3倍になる。トンレサップ湖は東南アジア最大の淡水湖で、世界有数の豊かな内水面漁場である。浅くて栄養分に富み、毎年10トン/km<sup>2</sup>の漁獲があるとされる。カンボジアの人々にとって大切なタンパク源の恵みである。トンレサップの周辺には、12～3世紀を頂点として前後600年間におよんだクメール帝国のアンコール遺跡群が点在する。

プノンペンから南シナ海に注ぐ河口までは、332キロメートルである。その下流域にはメコンデルタが形成され、デルタの総面積は約650万ヘクタール、その大部分はベトナムに属する。わずかにタイニンとロンスウェン西部に山塊があるだけで、最大標高2～3メートルの低平地である。

## (2) 支流の踏査

ところで、メコン河流域の地域総合開発の動きは、1950年代初頭に国際連合のアジア極東経

済委員会 (The United Nations Economic Committee for Asia and the Far East, 以下ECAFEと略、現在はESCAP: 国連アジア太平洋地域経済社会委員会) が、現地調査をスタートさせたのが最初である。その後1957年のECAFE総会で研究開発の重要性が決議され、沿岸4ヶ国 (カンボジア、ラオス、タイ、南ベトナム) を中心に援助国も含めて「メコン河下流域調査調整委員会」 (The Committee for Coordination of Investigations of the Lower Mekong Basin; 略称メコン委員会) が結成された。

翌年1月、メコン委員会は基礎調査作業計画<sup>(3)</sup>の作成を国連技術援助局に要請した。ここで当時の日本政府も関わった支流踏査について紹介しよう。日本政府はこの作業を遂行するのに必要な経費27万ドルを拠出した。外務省の委託業務実施機関として「Mekong河総合開発調査会」が国際建設技術協会と海外電力調査会の協力の元に設置されて、1959年から1960年に専門家による踏査が行われた。その踏査の成果が取纏められた『MEKONG河下流域主要支流踏査総合報告書』 (日本政府メコン河踏査団、昭和36年) には、流域4か国に含まれるメコン河支流34河川について調査結果が記され、そのうちの16河川のダム建設による開発可能性が結論づけられている。さらにそのうち、技術的可能性、受益性、人口、労力、資金などから最も優先されるべき計画、近い将来に工事の着手を勧告したい計画が8支流に絞られ、建設プランが具体的に提示された。

この報告書は、短期間に行なわれた踏査とはいえ、メコン河とその支流の開発に関する貴重な調査資料として、現在でもその価値は評価されるだろう。異なる体制の対峙の中で戦禍の

絶えなかったインドシナ半島は、その後何年も時が止まった自然・社会空間であったからだ。調査結果の結論は、メコン本流および支流に適切なダムを建設することによって、洪水調節、農業灌漑、舟運、水力発電などの水資源開発を行なうことが提言されている。その結果豊かな森林・鉱物資源の経済的利用・搬出が可能となる。

ただ今日的視点から見れば、技術面ばかりが「開発」の関心事である点が気になる。これからの開発調査には、技術的あるいは短期の経済的効用面からだけでなく、流域の自然と人間の環境に対する周到な研究、人々の歴史・文化・生活への洞察を含む総合性が求められるのではなかろうか。

## II. 東北タイの農業開発と環境破壊

### (1) コーラート高原の自然と社会

さて、I-(1)で触れたメコン河中流域に位置する東北タイのコーラート高原は、タイ国の国土面積の3分の1を占める。全体はメコン河にむかって緩やかに傾斜する波状の丘陵地で、谷間や盆地、大小の河川が偏在する。その主なものをあげると、中央部にはポング川とパーウ川を支流にもつ大きなチー川、やや南にムーン川が流れ、2つはウボールで合流してメコン河に注ぐ。北西には、フン川、モン川、ポン川、また北東部にはソングラム川、ガム川、フィバンサイ川が流れる。

1960年に提出された先の報告書によれば、コーラート高原の大部分は森林に覆われ、耕地は全体の17%しかなかった。森林の植生を概観

すれば、盆地の西と南を縁どる山地帯には熱帯常緑林が分布し、盆地内の丘陵地は乾燥フタバガキ林が中心であった。

東北タイは、タイで最も雨の少ない地域である。12月から4月までの乾季にはほとんど雨は降らない。木々は落葉し、地面は完全に乾く。人々は飲み水の確保にも苦勞する。水田耕作はほとんど天水に依存し、灌漑は未発達である。当時の日本の調査団は、タイ政府が水不足問題の解決のためにコーラート高原に100数十ヶ所の小貯水池の建設を目指し、そのうちのいくつかは工事中だと記している。

歴史をさかのぼれば、コーラート高原は8世紀から11世紀にかけて豊かな地域であったとされ、地下の岩塩層を利用した大規模な製塩と製鉄が行なわれていた。全体を概観すれば北部は仏教徒の環濠集落で有名なドヴァラーティ文化圏<sup>(4)</sup>に入り、南部にはヒンドゥー教の石造寺院をもつクメール人が住んだ。その後、北方からラオ人が入植した。また南部には14世紀以降にタイ族が進出して、クメール系との混血が進んだ。そのためここには現在でも、ムーン川を境に北側に「東北部のラーオ族」、南側に「タイ・コーラート」と2分類されるエスニック・グループが共存している。

バンコク政府は、チャオプラヤ河から地理的に遠い上に、こうした歴史的特殊性をもつメコン流域の東北タイ社会を、同化政策によって「タイ化」しようとしてきた。中央集権体制をとって経済発展を推進するには、地方農村の国家統合は政治的にも経済的にも不可欠であろう。

しかも、東北タイは国際政治の戦略上、ベトナム戦争の後方基地として重要視された。実際に

アメリカの援助によって60年代から「地域社会開発」政策が行なわれてきたし、1975年にベトナム戦争がおわると、貧困層への共産勢力の浸透を恐れた政府によって「農村雇用創出事業」が展開された。生産性の向上やインフラ整備、農民組織の育成に、日本はじめ国際機関による様々な援助が行なわれてきたのである。<sup>(5)</sup>

しかし、それにもかかわらず東北タイの生活水準の低さは、全国でも際立っている。東北タイには、全国の農民の約4割に当たる約800万人が生計を営み、農家の9割は自作農である。1世帯当たり約3.6ヘクタールの土地を保有するが、米の収量は1ヘクタール当たり1.24トンに過ぎない<sup>(6)</sup>。東北タイの「貧困」は、なぜ解決されなかったのだろうか？

## (2) キャッサバ栽培の拡大と森林破壊

タイは、途上国のなかでは、順調な経済発展を遂げた国の一つである。タイ経済の近代化のポイントは、商業的農業の推進と多角化の成功にあったとされる。コメやチーク材輸出に依存した戦前型の経済が70年代に急速な輸出農産品の多様化を遂げ、外貨獲得に貢献して工業化の推進を支えたのである。<sup>(7)</sup>

米作と競合することなく、東北タイでは丘陵地にタピオカの採れるキャッサバの生産地が拡大された。とりわけ東北タイでは、今述べたベトナム戦争の後方基地に軍事用として整備された道路網が、輸出商品作物生産のインフラストラクチャーとして活用された。タイのキャッサバ生産は世界第2位、飼料用として主としてヨーロッパに輸出された。そのようなタイの農業発展のありようは、国家レベルの成長を問題

としたこれまでの分析のなかでは高く評価されることが多かった。

しかし、キャッサバ栽培の拡大は、農村過剰人口の森林地帯への「不法侵入」と森林伐採を伴って進行した。キャッサバ畑は急激な地力低下のために連作できず荒地となり、さらに新たに開墾地が拡大された。このような「開発」は生態系の破壊をもたらし、東北タイの貧困を不可逆的に深刻化させた。田坂敏夫著『熱帯林破壊と貧困化の経済学；タイ資本主義化の地域問題』（御茶ノ水書房、1991年）から、この問題を学ぶことができる。

キャッサバは、森林地帯を伐採した後の緩やかな傾斜のある土地に植え付けられる。手軽な換金作物として、ムーン川上流のナコンラーチャシーマー県はタイ最大な作付面積を誇っている。この開墾によって、最大の破壊を被ったのはフタバガキ種の樹木であった。1961年から1983年の間に、東北タイの森林は60%以上が減少した。森林破壊がピークに達するのは1978年から82年である。コーラート高原中央部、チー川流域のそれが最も著しかった。20年間には耕地は2倍になり土地なし農民の発生は抑制されたが、その結果引き起こされたのは、塩害、土壌侵しよく、旱魃など自然の物質循環の破壊であったという（図2参照）。

塩害発生のメカニズムは次のように説明される（図3参照）。森林の破壊によって、地下水の水位をおし下げる樹木の機能が働かなくなる。毛管現象などによる地表面の蒸発がおこると、上昇する地下水とともに山頂部に塩分が集積される。塩害を引き起こす要因には、「開発」のための貯水池の造成も挙げられる。貯水池の地

図2 タイにおける土壌侵食（1981年）

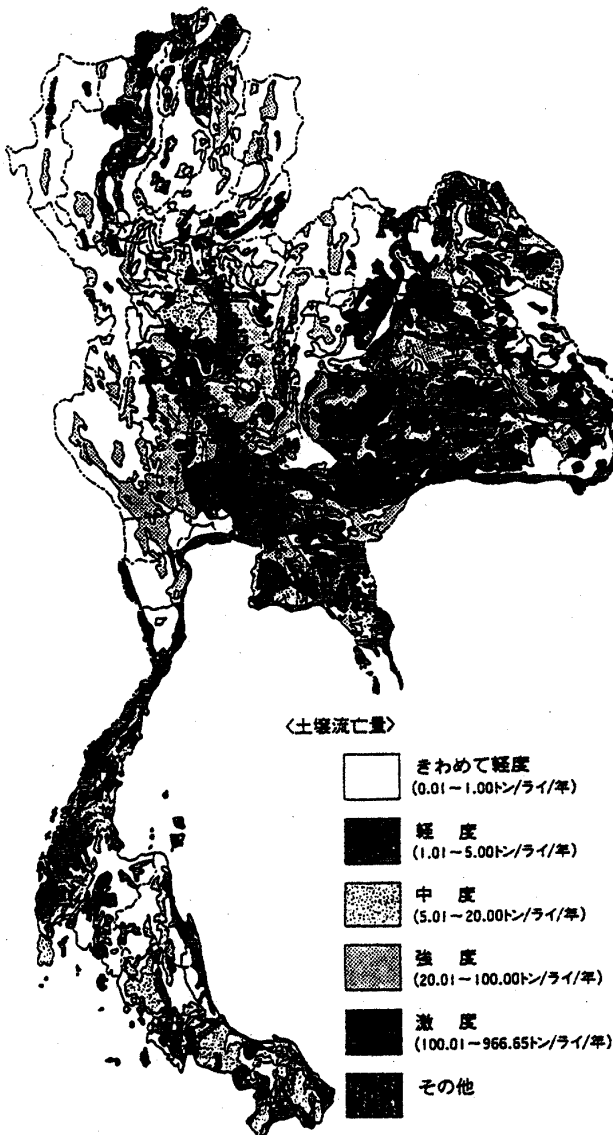
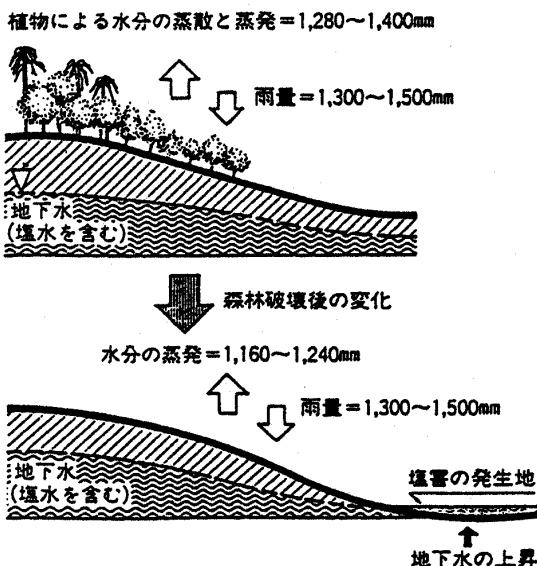


図3 森林破壊と塩害の発生メカニズム



下への漏水が、塩分を含む地下水を毛管連絡によって引き上げるからだ。また地下に岩塩層の横たわる傾斜地に池が造成されれば、漏水は岩塩層に達して塩分を溶解し、同様の現象を引き起こすという。

丘陵の麓は通常水田地帯であるため、丘の周縁部に塩分を含む地下水が漏出すると、苗の立ち枯れ状態が表われる。農業用水の塩水化は、稲作の生産を低収量にとどめる決定的な要因となっている。

森林の伐採による裸地化が山地の傾斜面で進むと、熱帯に特有なスコール状態の降雨は土壌を侵食する。地面を覆う植生が取り払われるため傾斜地に広がる畑作地は、侵食を受けやすい。タイ政府の土地改良局の調査資料によれば、土壌の流亡量は、コーラート高原の北部、ウドンターニー、コーンケーン、カーラシン諸県と、南部のローイエット、ナコンラーチャシーマー、スリン、ウボンラーチャターニーの諸県に多い。田坂の研究によれば、それらは塩害の激発地域とも一致する。

土壌と栄養物の流出は、農作物の収量低下を引き起こすだけではない。侵食土砂がムーン川やチー川の河川に建設されたダムへも流入し、浚渫作業のコスト、ダム使用可能年数の短縮などの問題を生んでいる。

森林破壊は、大気循環にも影響を与え、気候の乾燥化を進める一因となる可能性がある。気候の乾燥化は降雨量の減少をもたらし、地表の砂漠化は一層促進されるだろう。

森林伐採を認可する地方行政のシステムにも

図2、3は田坂敏雄『熱帯林破壊と貧困化の経済学——タイ資本主義化の地域問題』御茶の水書房、1991年の80ページ、および64ページ。

問題がある。地方の森林局管理部は伐採権の発行という「管理」を通じて、伐採業者から取り立てるロイヤリティーなどの財政を増大させたという。

破壊された森林は植林によって修復されないのだろうか？最近、タイ政府は官民あげてのユーカリ植林を推進している。ユーカリは急成長樹種で土壌の改良や経済性の高さで「有益な作物」とされる<sup>(8)</sup>。劣化した土地の利用権をユーカリ植林業者に売却し、その日雇としてユーカリの植え付け作業に従事する農民が増えているという。しかしこのようなユーカリ植林事業の実態に触れて、田坂は前掲書のなかでユーカリ植林の生態系への有害性をむしろ強く主張している。<sup>(9)</sup>

以上は、メコン河中流域のコーラート盆地における開発と環境の深刻な状況であった。次に下流のデルタ地帯における、最近の開発の事例を紹介したい。

### Ⅲ. メコンデルタ；最近の農業開発

#### (1) デルタの自然と稲作

メコン河はベトナム領では本流のティエンザン川にハウザン（バサック）川が並行して流れ、ティエンザンはヴィンロンで4つの支流、すなわちミト川、バライ川、ハムルオン川、コチェン川に分かれて南シナ海に注ぐ。ベトナムの人々は、多数のメコン河口を9匹の竜の頭にたとえ、クーロン（九竜）川と呼ぶ。

デルタの新沖積平野は一太米作地帯であるが、ここでも耕地は天水田が主で灌漑は発達せず、水田面積はデルタ総面積の約4割を占めるにす

ぎない。今後の開発によって引き出される潜在力は非常に大きいといわれる所以でもある。デルタの土は、メコン河が運んでくる微細な泥土が沈殿した肥沃な粘土である。それは農作業上最も扱いやすく、土壌のエッセンスといわれる。<sup>(10)</sup>

低平なデルタでは、降雨量の増える雨季（通常5月から10月）には河川の水位が上り排水が農業上の問題となる。反対に乾季の渇水期には、かなり奥地まで潮水が侵入する。それはデルタのなかを複雑に交差する川や多くの小水路に逆流し、デルタ全体の約3分の1の水路網に塩分が含まれる。これもまた農業開発の大きな課題となっている。

デルタの稲作の基本的な地形区分は、戦前と戦後であまり変わっていない。雨季の1回移植地域が最も多いが、雨季の降雨とともに田んぼの湛水深が長期にわたって増す地域（新デルタ）では、2回移植をする。海岸平野では塩水の侵入を防ぐための畔を造り、や中期種米を栽培する。自然堤防のある後背氾濫原地域では急激な湛水深の変化に対応できる浮稲栽培が行なわれている。ベトナム戦争中も60年代以降には高収量米品種の導入が見られ、2期作、3期作が行なわれる地域が増えた。

歴史的にはデルタの中部、西部、南部では、19世紀後半以降のフランス植民地時代に、稲作が発展した。フランス植民地政府が実施した排水と交通用の幹線運河の掘削によって、輸出米生産を目的とした開拓が著しく進んだからである。1920年代最盛期のコメ輸出量は年平均180万トン以上で、英領ビルマに次ぐ世界第2位のシェアを誇った。戦後は戦争により輸入国に転じたが、1989年より再び輸出ができるようになり、



1990年にはタイ、アメリカに次いで世界第3位、160万トンのコメ輸出を達成している。

メコンデルタの中でフランス植民地時代に開発が半ば放棄されていたのは、最も排水が困難とされたアシの平原（ドンタップムオイ）と、ウーミンの森（ミンハイ省・カマウ半島のマングローブ林地帯）、そして七姉妹とよばれたカンボジア国境南の山塊周辺低地部である。現在ベトナムでは、この三地域の開発が本格的に進行中である。このうちの前者2地域の開発の一端を、次に紹介したい。

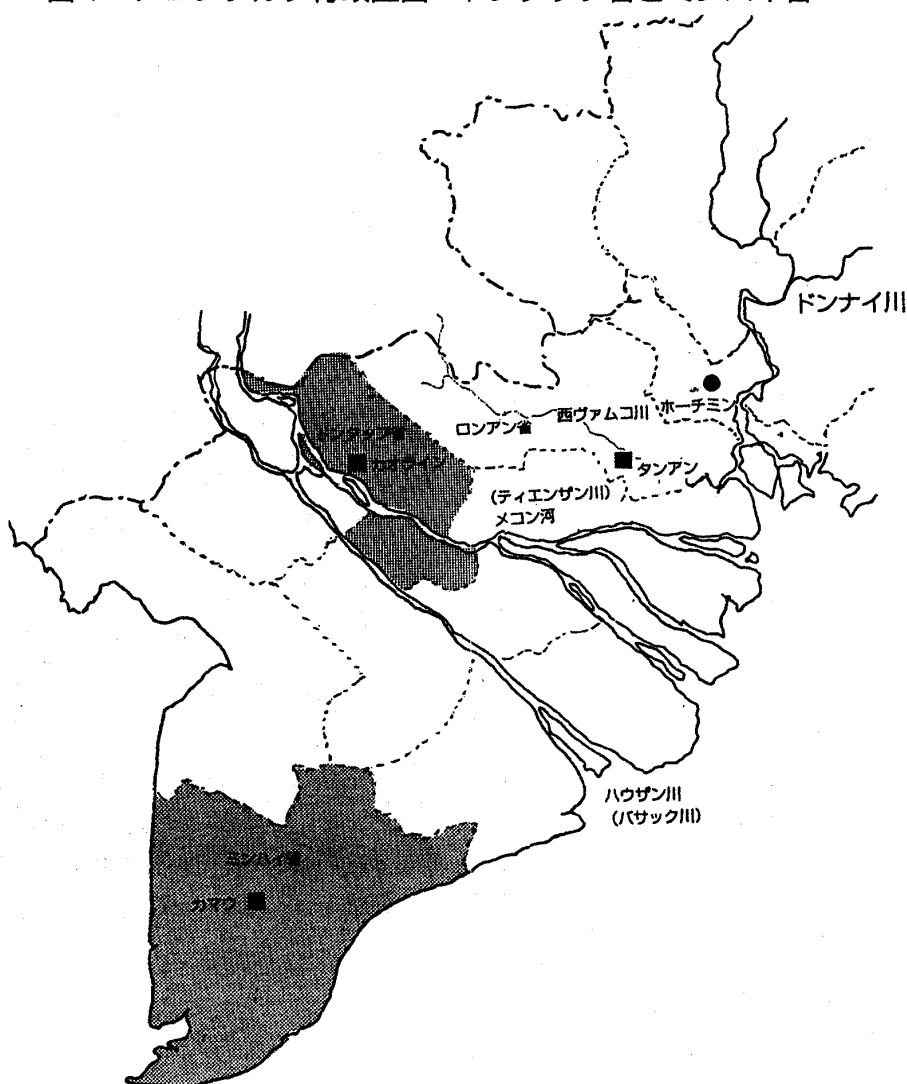
および、雨季には4メートルの水深となるところもある。そこは人間の居住に容易に適さない土地ではあるが、いたるところにハスの花が群生し、多種の動植物の宝庫である。またその地には、1862年から1867年の間、ここに潜んでフランス軍の侵略に抵抗した民族の英雄、Doc Binh Kieuの記念碑が立てられている。

タップムオイ湿原の開発は、サイゴン解放後にベトナム政府が行なった南部における「社会主義的農業改造」の成功例の一つに数えられている。西ヴァムコ川上流の水をこの湿原に運河

## (2) ドンタップムオイおよびカマウ半島の農業開発

ドンタップ省は人口約140万（1991年）、ティエンザン川の左岸に沿ったカンボジア国境に位置している（図4参照）。毎年6～7月になると川の水位が上がり、8月～9月になると洪水が始まる。自然堤防を越えてアシの平原（Dong Thap Muoi）に水が流入する。東隣りのロンアン省をながれる西ヴァムコ川で排水されるが、土地が低いいため十分水ははけず、大部分が水面蒸発で消失する。そのため明礬の沈殿を残し、従来作物の育成は困難とされていた。草原とメラロイカ林（melaleuca leucadendron）からなる低地で、土壌は強酸性硫酸土壌である。湿原は面積約65万ヘクタールに

図4 メコンデルタ行政区図：ドンタップ省とミンハイ省



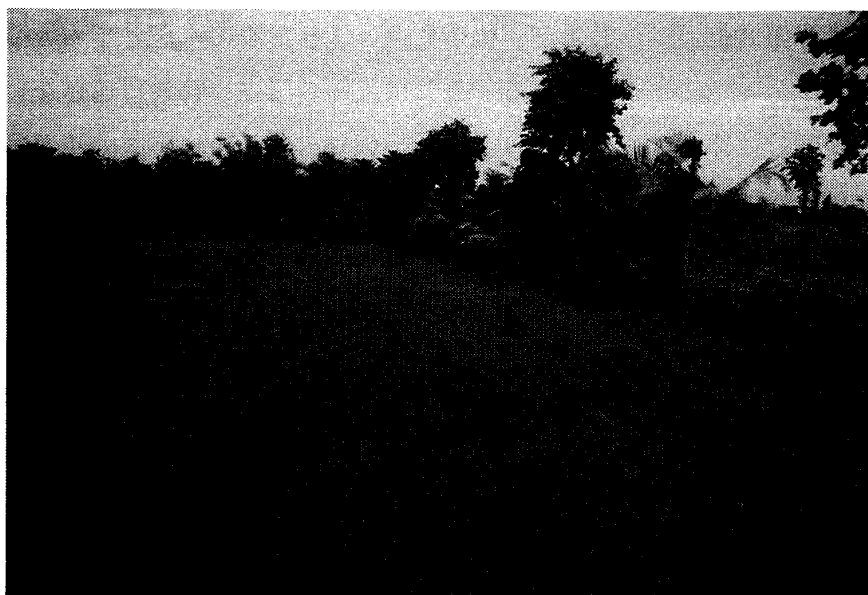


写真1 ドンタップ省の開拓された新田。新田の間に村に向かう小道があり（写真右手）、両側にキャッサバ、ヤシ、ユーカリなどが植えられている。（1993年8月筆者撮影）

を掘って貫流させ、ドンタップ、ロンアン、ティエンザン3省にまたがる30万ヘクタールの乾季作米用の灌漑に利用した。人口稀薄なため、開拓にはベトナム北部の農村地帯から移住者が募集された。開発の結果、1975年には30万トンにすぎなかったドンタップ省の籾生産は、1990年には126万トン、1992年には135万トンに増大した。同省の水田作付面積は約29万ヘクタールで、2期作、3期作も行なわれている。作付は90年冬春作（乾季作米）が52%、夏秋作（雨季作米）が44%、秋作4%で、ヘクタール当たり平均収量は4.55トンと発表されている。<sup>(11)</sup>

1992年10月にベトナム政府はマレーシア政府との間に一つの協定

を結んだ。マレーシア政府がドンタップ省の湿原10万ヘクタールの水田開発に投資し、産出されたコメを2～5年間定期契約するというものである。マレーシア政府は同省のインフラ整備、水利・電化・水の供給・交通などの分野にも資金供給する。同様にインド政府も、インド向け米生産のための4万ヘクタールの水田開発に投資する予定だという。毎年の食糧米の安定かつ廉価な輸入を目指す南々協力の一例である。<sup>(12)</sup>

開拓時の当面の入植者の食糧となるヤムイモ生産をはじめ、果樹（オレンジ、タンジェリン、ミカン、ロンガン、バナナその他）、大豆、砂糖キビ、たばこなどの生産および油分を採取するカユプテの植樹、



写真2 ドンタップ省の籾集散地。運河添いにある中規模の精米工場の前に、籾米が次々と運びこまれる。

（1993年8月筆者撮影）

日用品であるイグサの生産、その他養蚕、養豚、エビ養殖も行なわれている。また、80年代に始まった外資導入政策のお蔭で、小規模ではあるが同省でも加工企業（例えば精米、米粉、缶詰、冷凍工場など）が設立され、その資本金の7割を外資が占めるまでになっている。現在でも経済開発のための投資を求めて、同省が英字の経済紙を通じて積極的に先進諸国に働きかけている。<sup>(13)</sup>

メコン河に臨むドンタップ省の省都カオライン（ホーチミン市から160キロ）は、ここ数年目立って人口が急増した。人口は89年の41000人から、たった2年間で91年には125000人へ3倍になり、2010年には30万都市になるだろうと予測されている。とはいえ、省都の発展は、ドンタップムオイの開発による結果とは言いがたい。むしろ省都がカンボジア国境およびバサック以西へ向かう交通の要所にあることから、最近激増しているカンボジアを通過してベトナムに流れる密貿易商品の中継地としてのカオラインへ、流入人口が増大しているのが実情ではないかと考えられる。

ドンタップムオイにおける農業開発の推進は、先に見たように人口の多い北部の農民の移住を斡旋しているという意味では、ベトナム史の有名な「南進」（紅河デルタに起源をもつベトナム民族の南下）の今日的過程として興味深い。フランス植民地政府もメコンデルタの開拓を進めようと人口稠密な北部の農村から労働力を調達し、南部に入植させる計画を実行に移そうとしたことがある（それは十分な成功をおさめるに至らず失敗した。）。付け加えるならベトナム戦争後のハノイ政府の政策には、経済的要因の

みならず、ドンタップが反コミュニズム運動を展開したことのあるホアハオ教徒の集中する地域であった<sup>(14)</sup>ことも影響しているのではないかと筆者は推察する。昨年8月に筆者が訪れたドンタップムオイの開拓部落は、舗装途中の道沿いに貧しい農家が並び、掘削された水路の交差するターミナル・マーケットも、仏領期に開発されたバサック川以西の水路沿いの商店列とは比較にならないほど小規模であった。水田脇の用水路の水は、明らかに硫酸酸性と見られる青黒い色が残り、農地改良の余地はまだまだ大きく残されたままであるとの印象を受けた。

最近の現地の新聞によれば、ドンタップムオイのロンアン省にある2つの開拓村では、北部からの移住家族数は激減しているようである。<sup>(15)</sup>農民は市場経済に敏感で、米作に固執することなくより収益の上がる作物栽培を選択するからであろうか？

1986年以降の政府の市場開放、ドイモイ路線の堅持によって、ベトナム社会は急速な変化を遂げている。前述したように、1993年夏に筆者はベトナム北部の紅河デルタと南部のメコンデルタを1ヶ月視察する機会を得たが、南北の変化のペースが非常に異なる点に目を見張った。北部のダイ川河口の農村では、現在でも海にむかって水田を拡張していくベトナム農民の稲作に対する執念（それは仏領時代にフランス人研究者や植民地官吏によっても驚きをもって記されていた。）を眼前にして驚嘆した。政府による人的資源の効率的配置政策にもかかわらず、北部デルタの農民は大抵の場合、故郷の省や村を離れるのを嫌がる傾向が現在でも強い。開拓農家に提供される開拓準備金は、各地方予算や

政府の援助から支出され、一説では400万ドンと伝えられるが、最近では資金の供給が滞りがちで、結局、計画変更の可能性が強い<sup>(16)</sup>。

依然として稲作に固執しがちな北部農民に対して、メコンデルタ最南端カマウのミンハイ省では、生産条件の悪い稲の単作を多くの農民は放棄して、輸出用のエビ養殖に活気づいている。彼らは農業銀行の融資を得て養殖場を準備し、稚エビを仕入れ、4ヶ月後に仲買人に引き渡す。数家族がグループとなりタイ資本との合弁会社をつくって技術移転をすすめるケースも出ている。<sup>(17)</sup>この地に多いクメール系ベトナム人も、同様にエビやカニの生産に精を出しているという。南部ではすでに数十万の人々がエビ養殖に携わっている。<sup>(18)</sup>

ベトナム戦争中に南ベトナム解放戦線ゲリラの拠点であったカマウ半島に生い茂るマングローブの密林は、こうした養殖場の造成にともなう景観が変化しつつある。密林のなかのクリークを長時間にわたって小舟で回遊した筆者にも、伐採されたマングローブが入植者の住居資材や燃料に使われる状況をつぶさに観察した。ミンハイの省都カマウは、ベトナム最南の地方であるにもかかわらず殺気立つ程の喧騒の町であった。市場経済の開放は、ベトナム社会を激しく不均等発展させているのである。

## おわりに

さて、小論で取り上げたメコン河流域コーラート高原は、イサーンと呼ばれるタイの貧しい農村地帯である。首都バンコクや海外への出稼ぎ・流出人口が最も多い地域と言われる。

人々は換金作物であるキャッサバ栽培のために森林を伐採し、畑作地を拡大した。その結果生じた生態系の破壊は、土壌の流出と塩害の発生によって稲作生産の低迷と地域の貧困化を招いた。それは、第三世界に共通に見られる、急速な商業的農業の発展がもたらした環境破壊の一つの典型的な例といえるだろう。コーラート高原での人々の経験は、環境保全に対する警句として、メコン河流域全体の今後の開発に生かされなければならない。

コーラート高原は、メコン河中流の人口800万を擁する一大盆地であった。バンコク政府の中央集権的視点による開発政策は、人々の生活改善を結局はもたらさなかった。東北タイはむしろ歴史的・地理的にメコン河対岸のラオスとのつながりが深い。メコン河の資源を有効利用するためには、流域住民の自発的な交流が保障される必要があるだろう。最近、東北タイのノンカイとラオスのヴィエンチャンを結ぶ橋が、オーストラリアの援助で建設された。それはメコン河にかかった初めての橋である。橋の建設がもたらす今後の変化に注目したい。

今年の日本経済新聞（3月28日）によれば、メコンデルタにも国際的支援を前提とした2本の橋建設の計画があるようである。メコン下流域のインフラストラクチャー整備はきわめて遅れている。カンボジア政府との調整をはじめ、メコン委員会の役割は、今後重要性を増すだろう。

メコン河下流のデルタで入植が始まったドンタップムオイは、かつてはメコン河の氾濫水で浸水する不良土壌、稲作放棄地だった。しかし1976年以降、ベトナム政府は国策としてここに

農業開発を推進した。ドンタップ省の開発は、いくつかの問題があるとはいえ、現時点では米作を主目的とした、国家による土地改良の一定の工学的成果を上げたとみなすべきだろう。今後、メコン本流の水量調節、水文のコントロールが技術的・社会的に可能となれば、残された課題も解決されるだろう。また、湿原の豊かな自然を生かそうとする人々の考え方もベトナムではすでに聞かれる。今後に期待したい。

これと対象的であったのが、市場経済化の中で農民個人の意欲と選択によって急速な発展を遂げつつあるカマウ半島ミンハイ省のエビ生産である。ベトナムで産出されるエビのほとんどは日本に輸出され、私達の胃袋を満たしている。その生産活動の一環として、マングローブ林の伐採が今も進んでいる。南シナ海にのびるインドシナ半島突端の豊かな自然は、ここでも危機に直面し、政府の保護政策は十分な効力を発揮してはいないようである。

以上にみてきたコーラート高原およびメコンデルタの農業開発は、いずれも海外市場を開発の引き金とする共通点をもっている。また生産と輸出を結び付ける外国資本（公的あるいは民間であれ）と近代技術の導入は、今日においても、開発の不可欠の要素のようだ。環境保全と開発の双方を重視せざるをえない立場にある行政の舵取りは、今後ますます重要な役割を担うだろう。経済発展を志向する第三世界の政府が、環境を保持するための資金や技術を先進国に求める理論的な根拠もそこにある。今後も継続して、メコン河流域の環境と開発の諸問題を追及していくことにしたい。

(注)

- (1) 鳥越皓之編『環境問題の社会理論：生活環境主義の立場から』御茶ノ水書房、1991年初版第2冊、pp. 8-9.
- (2) ティエリ・ヴェルヘルスト『文化・開発・NGO ルーツなくしては人も花も生きられない』片岡幸彦訳、新評論、1994年 (Thierry Verhelst, *Des Racines Pour Vivre*, Editions Duculot, Paris-Gembloux, 1987) 参照。
- (3) この作業計画 (Wheeler Report) の項目は、①主要支流の踏査、②水文観測、③測量並びに地形図作成、④関連特別研究、⑤予備設計であった。
- (4) 7-11世紀に栄えたとされる仏教王国の遺跡・出土品の芸術様式。ナコーンパトム (メコン河沿いのラオス領タケク対岸) はタイの大部分を覆う権力の中心地であったとモン語碑文に記されている。
- (5) 北原淳『開発と農業』世界思想社、1986年、第2章参照。
- (6) 水野浩一『タイ農村の社会組織』東南アジア研究叢書16、創文社、1981年、p.29.
- (7) 当時のタイの輸出項目を見れば、サトウキビ、メイズ、タピオカなどの畑作物のシェア増大が著しい。メイズやタピオカは先進国の飼料配合用として需要が高まった。
- (8) ユーカリは5年で成木になるので、苗木として販売しても、成木として収穫しても、高い収益が得られる。チップ、ファイバーボード、紙パルプの原料に売られる。
- (9) ユーカリは土壌の脱水状態を作り出すため、周辺の植物は被害を受けやすい。木質は柔らかく、有用な木の実、薪炭材、農具の棒、飼

- 料や肥料等も提供しない。葉の形状が土壤侵食を促進し、緑陰も提供しない。田坂は、ユーカリ植林を生態系の攪乱要因と指摘している。同様の視点に加え、タイ政府の推進する植林事業を長期的に見れば経済的ダメージが大きいと主張する論文として、A., Puntasen, S., Siriprachai, & C., Punyasavatsut, "The Political Economy of Eucalyptus : Business, Bureaucracy, and the Thai Government," in *Asia's Environmental Crisis* edited by Michael C., Howard (Westview Press, U.S.A.,1993), pp. 155-167がある。
- (10) 日本政府メコン河踏査団『MEKONG河下流域主要支流踏査総合報告書』1961年、p. VI-10.
- (11) Vu Nong Nghiep-Tong Cuc hong Ke, Vien Quy Hoach & Thiet Ke-Bo, Nong Nghiep & CNTP, *So Lieu Thong Ke Nong Nghiep 35 Nam* (1956-90), Hanoi, 1991, p.585.
- (12) *Vietnam Business*, Dong Thap and Binh Thuan : Renovation and Development, Vol.3 No.13, July 1-15/1993, p.14.
- (13) *Ibid.*, pp.37-8.
- (14) Porter, Gareth, *Vietnam;The Politics of Bureaucratic Socialism*, Cornell U.P., 1993, p.41. ホアハオ教はフランス時代末期にメコンデルタ農民に信徒を集めた新興宗教。
- (15) *Nong Nghiep*, 16 -3 , 1994.
- (16) Le Trong Cuc and A.Terry Rambo (edited), *Too Many People, Too Little Land : The Human Ecology of a Wet Rice-Growing Village in the Red River Delta of Vietnam*, Occasional Papers of the Program on Environment (paper No.15) , East-West Center, Honolulu, 1993, p.50.
- (17) 同省の冷凍エビの輸出は昨年 2 万トン (9600万USドル)。彼らの現金収入は平均的ベトナム人のそれをはるかに上回っている。  
*Vietnam Courier*, No.27, March 6-12, 1994.
- (18) *Ibid.*, No.37,November, 1992.

## ABSTRACT

### Development and Environmental Issues of the Mekong River Basin : Focus on Cases of the Korat Plateau and Mekong Delta

Yoko Takada

The Mekong River, in its over 4,300 kilometers, passes through China and five different countries throughout the Mainland of Southeast Asia. This paper seeks to explain the recent economic developments which have caused environmental degradation in the Mekong basin of northeastern Thailand and southern Vietnam. Programs of "sustainable development" initiated by the United Nations during the 1980's, although defined as meeting the needs of the present without destroying resources for the future, have seriously damaged local environments due to their increased emphasis on commercial agricultural production for the world market. The cultivation of cassava for tapioca extraction has resulted in the deforestation of the Korat highland, and shrimp farming for the Japanese market has caused the loss of fertile mangrove areas in the Camau Peninsula. Similar results are evident in the exploitation of wet rice land in the Dong Thap Muoi, a swampy Mekong delta land bordering on Cambodia where the government has introduced settlers from northern Vietnam.